

# Kindai Hospital Today

vol.15

平成 24 年 10 月発行 / vol.15 金沢大学附属病院 〒920-8641 金沢市宝町 13-1 TEL.076-265-2000

## 病院長 ご挨拶

病院長 富田 勝郎



今年、加賀藩の種痘所に源流を發した金沢大学が150年を迎えた記念すべき年です。これを記念して5月30日に金沢大学創基150年記念式典・祝賀会（日航ホテル）が行なわれ、7月7日には金沢大学医学部創立150周年式典・祝賀会（十全講堂・医学部）が行なわれました。いずれも金大附属病院そのものの歴史でもありますので実に慶ばしいことでした。病院としてもお祝い行事をしては？という

意見もありましたが、これ以上、屋上屋を重ねることはせずに、150年記念ロゴ入りのマグカップを2000余名の全職員にお届けし、各自各部署でこれで乾杯していただくことにしました。この大きな節目に職員の皆さんと共に歴史の証人となり、誇りと使命感をもって更に前進していけることを大変嬉しく思っています。

さて、ご承知のように金大病院の理念は、「医は仁術」を基本に人間性豊かな医療を実践していくことです。その具体的な使命の姿は、①「一般的、標準的治療」に対する最高・最善の医療の実践、はもちろんのこと、②専門医チームによる「高度先進医療」の追求・開発や、③ICUや多方面の専門医の知恵を結集した「最後の砦」医療への挑戦、④予防的先進医療への志向に見てとれます。即ち金大病院は、江戸時代の種痘所開設以来150周年を経て、目下、「予防医学から⇒標準的治療⇒高度先進医療⇒最後の砦医療に至るまで」の全ての医療の姿を、「医の心」を胸に最新設備と洗練された医療技術で実践しているといえましょう。噛み砕いて言えば、古来から言われている医療の原点、即ち“おもいやりの心”を基軸に最善の医療を実践しつつ、厚い信頼を得ながら今日の姿にまで発展してきたのです。

金大病院が新しく完成して3年ともなると、所々微修正したい部分が見えてくるのは当然です。まず内科処置室をもっと広くしてほしい、という要望をきっかけとして、入退院センター、地域支援センターなども移設し、患者さんのアメニティを高めることにしました。また、患者さんや多くの職員から各外来フロア付近に「もっとくつろげる場があればいい！」というご意見を頂きましたので、プロムナード奥の1、2、3階フロアともにそのようなスペースを増設しました。さらに4階では翌春スタートに向けて「金大病院CPDセンター」の工事が始まります。地域医療支援の一環として出来上がるこのセンターが、宝ホールと連動して、医療人の生涯・専門研鑽に向けた講演・研修・技能トレーニングなどの啓蒙活動の場となり、ひいては地域医療レベルの底上げ、医師・看護師不足の改善に役

立っていただくと願っています。

一方、病院正面の整備工事はC棟（総合臨床研究棟）の追加工事と連動していますので、あと2、3年かかりますが、正面には幅広いサンルーフを取り付け、立体駐車場も増やし、完成時には「金沢名物の雨も雪も気にせずアプローチできる大学病院」にしたいと思っています。

これからも職員皆さんの建設的なご意見をお待ちしています。



# 新病院幹部の紹介



谷内江 昭 宏  
(人事・労務担当)

本年4月より副病院長（人事・労務担当）を拝命しました、小児科長の谷内江昭宏（やちえあきひろ）です。

能登半島の先端、輪島市の郊外（と言えば聞こえが良いですが、事実上の限界集落）の出身です。大学入学のために金沢に出て以来、こちらでの生活が長くなってしまいました。もともと大都市志向がなかったこともありますが、この街の程よい大きさと静かな佇まいに、住み心地の良さを感じています。

金沢大学とその附属病院はその歴史的役割から、北陸3県の医療の牽引役として重要な使命を担ってきました。好むと好まざるに関わらず、この地域の医療の最後の砦として常に一流の診療を提供することを期待されています。一方、大都市を中心に医療資源の集約化と効率化が叫ばれる中で、私自身の出身地である能登や、南加賀地区は医療過疎を含む「行政過疎」の犠牲となりつつあります。知恵と工夫が必要とされています。このような時代であるからこそ、金沢大学附属病院は地域のネットワークの要として、新しい役割を創出できるものと信じています。私の仲間がかつて言っています。「この地に生まれたことを後悔させない医療を実現したい」。

地方にはそこそこの医療、ではなく、日本にそして世界に誇れる医療をこの地で実現するために、躍進する「金沢大学附属病院」を創るべく微力を尽くしたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。



絹 谷 清 剛  
(診療担当)

本年度から診療担当副病院長を仰せつかりました。病院執行部会議に参加した当初は、かわされる会話が理解できない状況でしたが、徐々に理解の度合いを深めてきました。わかってくるにつけ、大学病院の運営のシビアさを感じています。

任についてから数ヶ月間会議の末席を汚すうちに、文科省・厚労省が全国の大学・大学病院を、様々な面で階層分けしようとしていることを学びました。振り返って考えると、私が病院運営委員会に出席する立場になった6年前から、場に提出されていた議題の多くがこれに類していたことにより気付きました。我々の病院を階層の上位に維持してこそ、富田院長が日頃強調される最後の砦としての機能が維持できるのであらうとひしひしと感じます。

診療担当という役割は、患者様に高度な診療を気持ちよく受けていただくために、医師・コメディカル・事務・院内アメニティに係わる方々等々、すべての皆さんが快適に診療・業務をできる環境を整えることにありと理解しています。必ずしもゴールに直線に向かっていくことができず、みなさんと頭を付き合わせて妥協点を探ることも必要になるかもしれません。時には、互いに激しく対峙することもあるかもしれません。しかし、ゴールは全員同じであるはずで。

今年度、来年度の2カ年は、東日本大震災に係わる復興目的に運営費交付金が削減されるために、病院運営には一層のシビアさが求められます。上記のようなことと相まって、このような時期に任に指名されたことをポジティブに捉え、全職員のみなさんとともに前進したいと思えます。みなさん、一緒にがんばりましょう。



# 緩和ケアチームの紹介

金沢大学附属病院の各診療科では、がんに対する治療を積極的に行っています。一方で、がん治療の経過中には、がんによるさまざまな苦痛を伴うことが知られています。緩和ケアチームは、がんに伴う苦痛を軽減することを目的に、平成18年5月に発足しました。現在のメンバーは、山田圭輔と藤井 怜（麻酔科蘇生科）、小野靖樹（神経科精神科）、丸谷晃子（がん性疼痛看護認定看護師）、原 祐輔、高橋佳子、平原佑季子（薬剤部）です。

がんの経過中には、持続する強い痛みを生じることがあります。痛みが持続すると活動性が低下するだけでなく、不眠、不安、抑うつなどの精神症状も増悪します。緩和ケアチームでは、これらの身体的苦痛や精神症状に対して各種の薬物を用いて対応をしています。非常に強い痛みに対しては、麻酔科医としての技術を生かし、神経ブロックを用いた痛み治療も行っています。

また、がんの経過中には自己の存在と意味が急速に消滅してしまうように感じ、自身のことを無力、無意味、無価値と嘆き、絶望してしまう苦痛（スピリチュアルペイン）に悩まされることも少なくありません。緩和ケアチームでは、医療者と患者が対話を行うことで、自己の存在と意味を回復できるよう支援するスピリチュアルケアを広く行えるよう準備を進めております。

緩和ケアチームでは、医学生（金沢大学医学部5-6年生）の緩和医療教育にも積極的に関与しています。がん医療では、がんに対する診断と治療（キュア）が最も重要ではありますが、一方でがんに伴う苦痛への対応（ケア）も欠かせません。病気だけでなく人間も診る「ケアマインド」を持つよう指導しています。医学だけでなく、医学を超えて人間の苦しみや悲しみを診ることができ、人間性ゆたかな医療人育成のための教育も緩和ケアチームの重要な役割と考えています。（文責：山田圭輔）



金沢大学附属病院緩和ケアチーム  
（左から）山田、高橋、藤井、平原、小野、丸谷、原

## 肝移植の現状と脳死下臓器提供の意思表示の重要性について

金沢大学附属病院 肝胆膵移植外科 高村博之

金沢大学附属病院では、これまでに67件の生体肝移植と2件の脳死肝移植を実施しました。日本国内ではこれまでに6000件を超える生体肝移植が実施され、改正臓器移植法が施行された今も、年間400件以上の生体肝移植が実施されています。一方、脳死肝移植は約10年間で153件が実施されたに過ぎません。改正臓器移植法が施行され、脳死者が生前に脳死下臓器提供を拒んでいなければ、ご家族の同意のみで臓器提供が可能になるとともに、15歳未満からの臓器提供も可能になりました。実際に、幼児からの臓器提供が行われております。また、ドナーの配偶者や子供、両親へ優先的に臓器を提供することが可能になりました。近年、脳死下臓器提供が増えたとはいえ、脳死肝移植の実施数は年間40件程度です。米国（人口約3億人）では年間6000件以上の脳死肝移植が実施され、お隣の韓国（人口約5千万人）では年間300件以上の脳死肝移植が実施されています。人口比に換算すると、日本（人口約1億2千万人）の脳死肝移植の実施数（約40件）はきわめて少ないと言えます。

一人の脳死者から、心臓、肺臓（左右）、肝臓、膵臓、腎臓（左右）、小腸が提供されることにより、ときには6人以上の患者様が健康を取り戻すことができます。脳死臓器移植は、まさしく臓器というバトンをつなぐ命のリレーに他なりません。



一方、生体肝移植では、健康なドナーに大きな犠牲を強いることとなります。

自分が脳死に陥った場合に臓器を提供するかどうか、じっくりとお考えいただき、その結論を是非ともドナーカードに書き込んでおいてください。もしくはご家族にその意思をしっかりと伝えておいて下さい。愛する人が脳死に陥ったら、残された家族はその現実を受け入れることに精一杯で、臓器提供について冷静に判断を下すことは困難です。しかし、臓器提供に対する故人の明確な意思表示がなされていれば、残された家族は迷わず決断することができます。

脳死下臓器提供に協力されたご遺族の手記や、脳死下臓器移植で健康を取り戻した患者の手記が、日本臓器移植ネットワークのホームページ（<http://www.jotnw.or.jp/donation/note.html>）で閲覧できます。是非一度ご覧になって下さい。



# 院内改装のお知らせ

新外来診療棟が平成 21 年に完成し、今年で 4 年目を迎えます。その間に皆さまから寄せられたご意見をもとに、昨年度から院内改装工事を行っております。そこで今年度、一部リニューアルをしました外来診療棟及び今後の病院整備予定をご案内させていただきます。

## 1 階



## 立体駐車場完成

平成 24 年 6 月 4 日に立体駐車場完成式があり、病院長はじめ病院幹部がテープカットで完成を祝いました。

今回の立体駐車場の建設は来院者の利便性の向上を考え平成 23 年度から平成 26 年度にかけての病院整備の一環として行いました。今後も病院整備が続くため、ご不便をお掛けしますが皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。





## 2 階

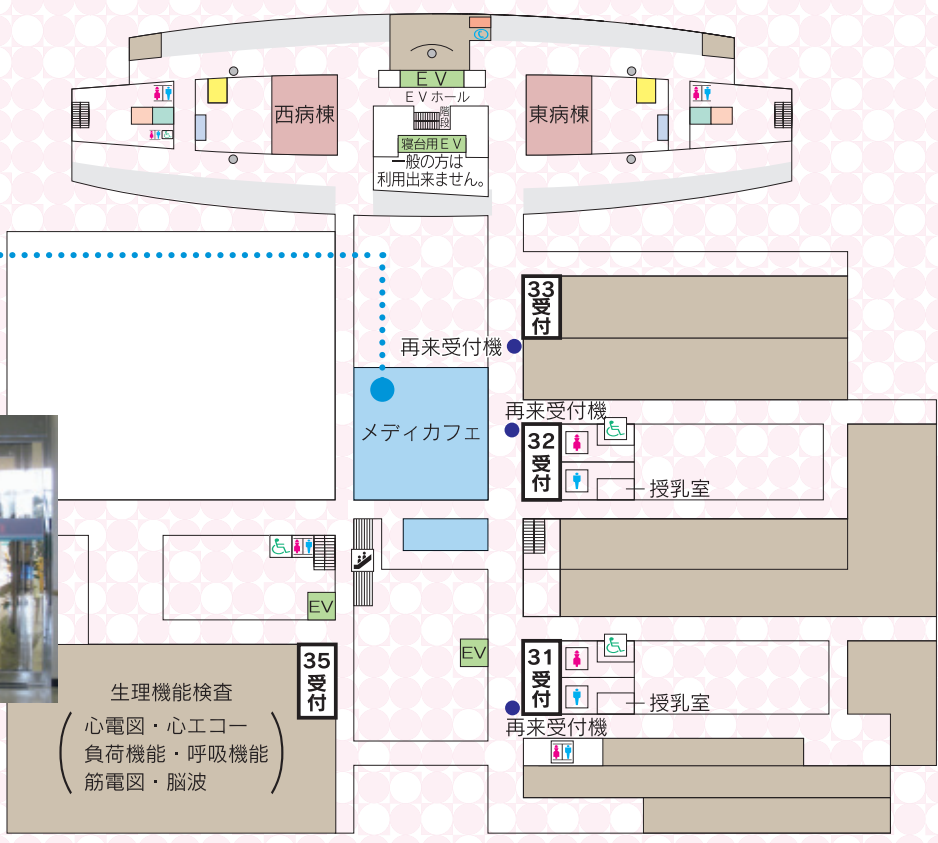


・3階から栄養相談室  
が移転しました  
・内科処置室が広くな  
りました

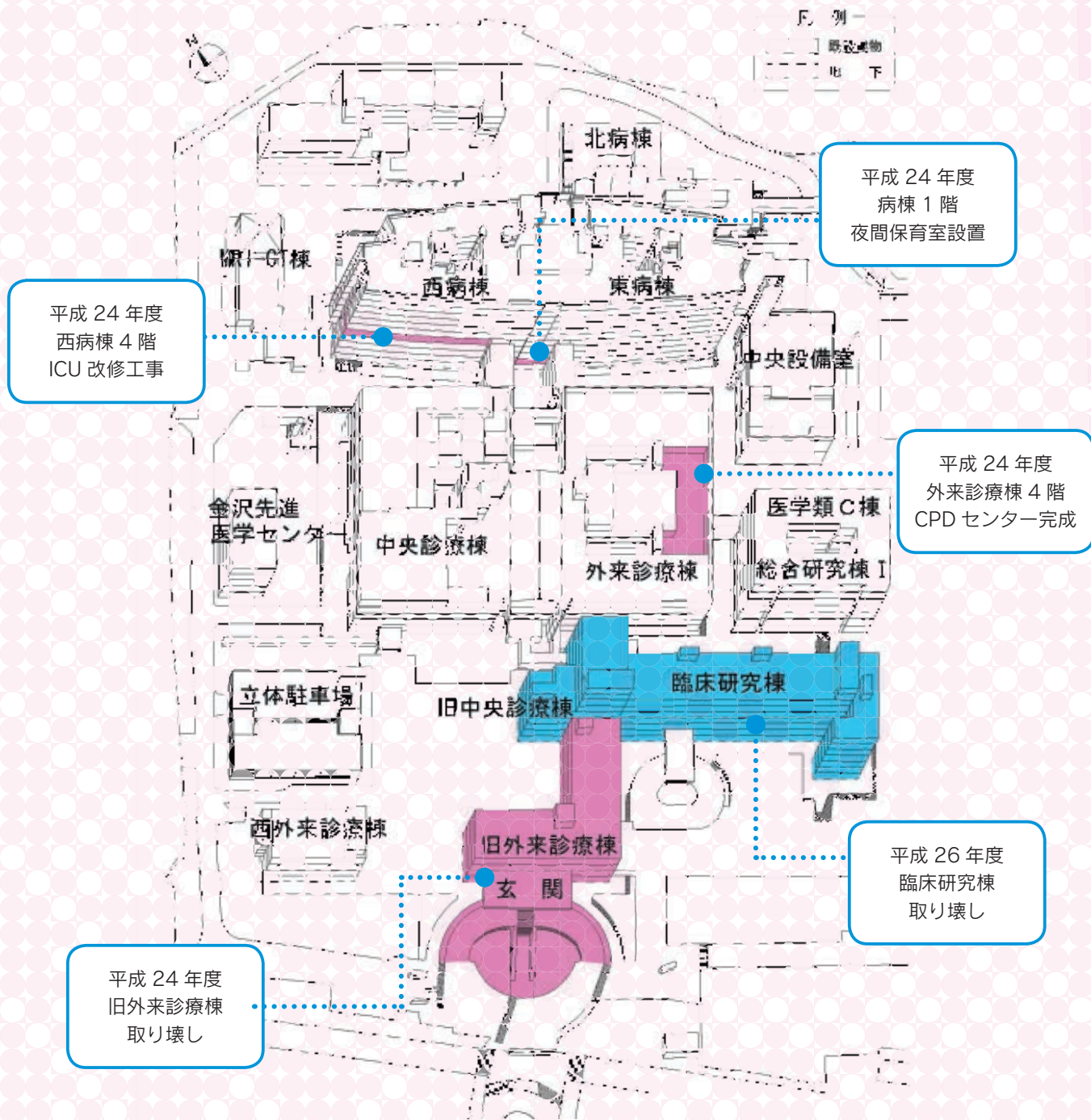


## 3 階

メディカフェがオープン  
しました。  
(雑貨・パン・ジュース・  
旅行を取り扱っています)



# 今後の病院整備予定



※今後整備の予定が変更になる場合がありますことをご了承ください。



金沢大学附属病院の完成予定模型



## 最適な看護をその時に「KIND」(カインド：金大式看護方式)の開始

患者さんのニーズにタイムリーに応えるために、看護の可能性を広げ、2名の看護師がパートナーを組んで、二人三脚で患者の観察・ケアをお互いの長所を理解・協力して行う看護方式「KIND」(カインド：Kanazawa University Hospital Interactive Nursing Development)を実践しています。患者さんからは「丁寧にみてもらえて安心」「対応が統一している」という声、看護師からは「看護ケアの技術・対応方法・観察のポイントが学べる」「個々の強みを活かし相互成長できる」と好評を得ています。また、時間外勤務削減・インシデントの減少・人材育成などの効果も出ています。患者さんにより安全で安心な質の高いケア、ホスピタリティあふれる看護を提供するために、「KIND」を発展させていきます。



## かるたで着こナース



私たち看護師は、患者さんが入院生活を過ごしやすいように、毎年看護用具工夫作品展を開催しています。その中で自分たちが身だしなみを整えて看護することをテーマにした“ナースかるた”を募集しました。約17文字の世界とイラストの世界の中ですが、絵かるたには、ユーモアあふれる手書きの絵やスタッフの写真などがあり楽しいものでした。また文字かるたには、なるほどと思うものや、日々の看護をイメージするものが応募されてきました。どれも看護師としての温かく凛とした気持ちのこもったものばかりで、これらを「いろはかるた」にしました。

## 「看護のあゆみ・第2集」の発刊

平成24年3月、金沢大学附属病院看護部は「看護のあゆみ・第2集」を発刊することができました。「看護のあゆみ・第1集」は平成2年3月の発刊であり、第2集は、それ以後の22年間の看護部の様々な取り組みや変遷をまとめました。その内容は「病院・看護の変遷」「看護部のあゆみ」「看護体制の変遷」「看護業務の変遷」「継続教育の変遷」「看護を取り巻く状況の変化」「文化活動 福利・厚生」等です。編集をする中で、特に金沢大学附属病院の看護を担う人づくりが伝統であると感じました。第1集では、先輩看護師が「現在があることは過去があることであり、未来があることである」と言われ、過去から看護師に脈々と伝承される看護に対する思いを受け継ぎ、そして、看護師としての実践能力を発展させながら患者さんに心のこもったやさしい看護を提供し続けていきたいと思えます。





# 平成24年度ふれあい看護体験

1990年にナイチンゲールの誕生日にちなみ「看護の日」が制定されました。

これからの高齢社会を支えていくためには、助け合いの心、相手を思いやる心がますます重要となり、育むことが必要となります。日本看護協会では「看護の心をみんなの心に」をテーマに、看護週間を設け、全国で毎年様々な事業を展開しています。

石川県看護協会でも事業の一環として、「ふれあい看護体験」が企画され、当院では毎年、高校生や小学生親子の体験を受け入れています。今年により多くの人に看護の心を体験して頂きたいと考え5月11日の金曜日に、過去最高の16人の高校生を受け入れました。

輪島、七尾、金沢、野々市から6校の参加があり、2人ずつ8部署で看護体験をしました。参加者16人中12人が看護職になりたいとの希望を持つての参加でした。

白衣に着替えた高校生は、病院長より一日看護師の辞令を受け、緊張と期待で各部署に向きました。血圧測定や洗髪、足浴、車椅子移送を介助する中で、患者さんから声をかけていただき緊張がほぐれ、何事にも積極的に取り組む姿勢が伺え、頼もしく感じました。



高校生は患者さんと実際に触れ合い、医療現場での患者さんに対する思いやりや仕事に対する責任感、やりがいを感じたと言います。また、看護師に絶対になりたいという思いを強くしたという高校生もいました。

ふれあい看護体験に合わせて、職員による「ふれあいコンサート」を開催しました。医師・看護師による楽器演奏や看護体験の高校生16人には、「世界に一つだけの花」の合唱で参加していただきました。会場にいられた患者さんやご家族から、心に染みた、良い時間を過ごすことができたと言ってもらえました。

## ■ 検査部は ISO15189 を取得しました

ISO15189とは、臨床検査室が厳格な品質管理に基づいた国際水準の検査値を提供していることを実証する国際規格です。品質マネジメントシステムと技術的要求事項を満たすことにより、検査値は国際標準レベルとなります。検査部では、ISO取得により一層の精度管理を行い、患者さんのためにより正確で信頼性の高い検査値を臨床に提供できるよう努めていきます。



Kindai Hospital Today  
vol.15

編集・発行 金沢大学附属病院 病院広報誌編集委員会  
(事務担当：総務課 調査・広報係)  
TEL 076-265-2936 FAX 076-234-4320  
皆さまからのおたより、ご意見をお待ちしております